別　紙

剥ぎ取り保存した囲炉裏跡

発見された囲炉裏跡

○囲炉裏跡について

・古墳時代初めごろ（約 1,700 年前）の竪穴建物跡の床面から見つかった炉跡。
・穴を掘って灰や炭を敷く「灰穴炉」と呼ばれる構造で、灰や炭が飛散しないように周囲に土手を巡らせている。
・周辺では囲炉裏で使用したとみられる鍋（甕）も出土している。
・炉内で見つかった筒状の炭化材（外径 22 ㎝、内径 12 ㎝、高さ最大 12 ㎝）は、囲炉裏施設の一部であった可能性があるが、類例がなく、その用途は特定できていない。
・炭化材は樹種同定によりケヤキであることが判明した。
・保存状態が極めて良好で、よく分かっていなかった古墳時代の炊飯や調理を解明するうえで重要な発見である。